



五七桐
伊達家

郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

仙台から石垣島へ 一岩崎卓爾を追って

仙台市民図書館副館長 千葉正数

筆者が石垣島を初めて訪れたのは、2007年1月のことでした。石垣空港はまだ新空港に移転する前で、到着した飛行機から地面に降り立ち、歩いて空港ビルに入るスタイルでしたが、暖かな空気が心地よく、冬の寒さに身構えていた身体がほどけていくような感じがしました。市街地を歩くと、御嶽（うたき）や古い石垣、頑丈そうなコンクリート造りの建物があり、珍しさと同時に懐かしさを感じました。そして、第一の目的だったマラソン大会も、サンゴ礁の海、マングローブの茂る川、サトウキビの畑といった景色に加え、沿道の製糖工場の前では特産の黒糖がサービスされるなど、島の魅力が詰まったコースで、以来コロナ前まで毎年のように1月の石垣島を訪ねるようになりました。

こうして石垣島に親しみを感じ、「仙台 石垣島」などと検索して調べてみるうちに、かつて仙台から石垣島に移り住み、足跡を残した人物がいることを知りました。

“岩崎卓爾（いわさきたくじ、1869～1937）は、明治31年（1898年）、〈わが国の台風観測の最前線基地〉として沖縄県八重山諸島の石垣島に創設されたばかりの測候所に所長として赴任、気象観測のかたわら、その半生を島の探究—歴史・民俗・伝承・昆虫など多彩な紹介にささげ、わが国の〈南島研究のさきがけ〉となった人である。

（中略）大正2年（1913年）、44歳のときに、妻子をふるさとの仙台に帰し、以後ひとり島にとどまって68歳の生涯を島で閉じたが、なにが彼をその島にとどめたのか。”

以上、岩崎卓爾の生涯を描いたノンフィクション『台風の島に生きる』（谷真介/著 偕成社 1976年）の「はじめに」からの引用です。この本で特に印象的なのは、故郷から妻を迎えた様子です。

石垣島に赴任した翌年、卓爾は5か月だけ奄美大島に異動します。その頃、古川に住むおじの紹介で、築館の20歳の女性との縁談が進みます。花嫁は、写真と手紙を見るだけで、卓爾のもとに嫁ぐ決心をしたそうです。そして、奄美大島で初めて出会った新郎新婦は、卓爾の帰任により二人で石垣島に戻ることになりました。

このような劇的なエピソードを持つ卓爾は、NHKのテレビドラマの題材にもなりました。その原作が『風の御主前（うしゅまい）』（大城立裕/著 日本放送出版協会 1974年）です。この本では、妻子を仙台に帰した際、石垣島で生まれ育った子供たちの目に仙台の景色や風俗が珍しく映った様子などが、生き生きと描かれています。

100年ほど前に生きた卓爾や家族の話を知ること、彼らを感じたであろうときめきや感動、安らぎなどの気持ちを追体験できることも、石垣島を訪れる喜びの一つとなりました。

※以上で取り上げた本は、仙台市図書館に所蔵があります。

※写真は、石垣島地方気象台に建つ岩崎卓爾の胸像です。



■ある日のレファレンスから

東京に住んでいるある方から、次のようなレファレンスをいただきました。

旧制仙台一中で甲子園に出場し、その後、早稲田大学、東急フライヤーズ、読売ジャイアンツなどで野球選手として活躍した日系二世の吉江英四郎という人物の資料を調べてほしいというもので、さらに英四郎の両親についての資料もあれば教えてほしいというものでした。

野球で活躍したのですから、当時の英四郎の資料は、いろいろと出てきたのですが、両親に関するものは調べようがなく、インターネット検索しても両親に関するものは皆無でした。しかし、野球の資料から英四郎がカナダ生まれであることは間違いないようなので、カナダ移民の資料を調べれば、何かしら手がかりが掴めると思い、あたってみました。

すると、山形孝夫／著『失われた風景 日系カナダ漁民の記録から』には、カナダ総領事館の書生であった「吉江三郎」が父で、母との間に4人の子どもをもうけたものの、昭和10年(1930年)に離婚し、母の実家の仙台に戻ってきたことが書かれており、その他、新田次郎の『密航船水安丸』の中にも英四郎の母がモデルである女性が登場していることが分かりました。また、山形孝夫氏の資料には、著者が調査のため訪れたカナダのバンクーバーで実際に英四郎本人に会ったエピソードや高校の後輩が営んでいるバーに、たまたま一人で立ち寄った際にカナダでの調査のことを話したところ、その後輩自身が「吉江三郎」の孫であったことが判明したことなど、偶然とは思えない不思議な逸話を知ることができました。

■新着図書紹介(郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書)

『宮城県美術館 誕生から移転断念まで 未来へつなぐ40年の軌跡』

大和田 雅人／著 プランニング・オフィス社 **S70 オ**

宮城県美術館は昭和56年11月3日文化の日に青葉区川内に開館しました。

本書前半では宮城県芸術協会の誕生から美術館開館までの道のりをたどります。美術館建設実現を目指し尽力した13名の地元芸術家がいたことや、建設地が川内に決まった経緯、建築家前川国男氏について知ることができます。

県民の希望で開館し、40年が経過しようとした令和元年に、県有施設再編として宮城県民会館と美術館の統合案が出されました。それが廃案となり、残ることとなった美術館の今後について、後半で語られます。

施設保存の大切さと、維持管理の難しさを同時に考えさせられる1冊です。



『絶版本』

柏書房編集部／編 柏書房 **S017シ**

【絶版】…出版社が、刊行した図書の印刷、販売を止めること。あるいはそのような状態。(『図書館情報学用語辞典<第5版>』より)

本書では、「あなたが、いまこそ語りたい『絶版本』はなんですか?」という問いかけに、大学教授やユーチューバー、哲学者、文芸評論家、翻訳家など、さまざまな分野で活躍する24人が自身の人生で大切な1冊について語っています。

本には、著者や編集者、関わった人たちの思いがこめられています。絶版=存在価値が無い、とは言えません。新刊だけでなく古い本も読めるのが、図書館のよいところです。みなさんも、誰かに語りたくなる1冊を探してみたいはいかがでしょう?



■編集後記■ 市民図書館工事休館からの再開後、最初の「郷土のかぜ」はいかがでしたか。4階業務も通常に戻り、皆様からのレファレンスも徐々に増えてきております。そして、気づけば、定禅寺通の樺の葉も落ち始め、もうすぐ、「SENDAI 光のページェント」が近づいているを感じさせます。その時期は定禅寺通側の窓からオレンジ色に光輝く絶景を見ることができますので、時間のある方は、どうぞ閉館の時間までにご覧ください。

発行: 仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地: 仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL: 022-261-1585